母と子のにわ

―利用者のみなさまと母子医療センターをつなぐ―

発行
地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪府立母子保健総合医療センター

第29号

2013　Spring

目次：

VPD(Vaccine Preventable Diseases)って何？　1

小児がん検診（神経芽腫検査）について　2

がんばり屋さん　3

いま研究所では　アトリウムの壁紙がリニューアルしました　4

VPD (Vaccine Preventable Diseases) って何？

皆さんは、VPDという言葉を耳にしたことはないでしょうか？これはワクチンで予防できる病気という意味の英語の頭文字を取った略語です。乳幼児期には病気に対する抵抗力（免疫力）が大人と比べて未発達なため、様々な感染症に罹（かか）りやすいのですが、風邪のように軽いものだけではありません。中には、確実な治療法がなくて、深刻な合併症や後遺症を起こしたり、命を落としたりする危険がある病気もあります。そうした感染症に対しては、罹（かか）らないようにまず予防することが大切です。感染症を予防するのに、安全で確実性の高い方法が、ワクチンの接種（予防接種）です。ワクチンは、病気を防ぐために必要な免疫を安全につける方法です。ワクチンを接種することで、子どもたちを病気から守ることができます。でも、すべての感染症に対してワクチンが作られているわけではありません。ワクチンで防げる病気（VPD）は、ごく一部にすぎません。

そろそろピークも過ぎてきましたが、ここではロタウイルス感染症を予防するワクチンについてお話しします。

ロタウイルス感染症は、冬季にロタウイルスに感染することによって嘔吐・下痢などの胃腸炎を発症します。そのため脱水症や重症例は脳炎を発症したりします。その感染症を予防するワクチンとして、ロタリックス（1価ワクチン、2回接種）、ロタテック（5価ワクチン、3回接種）の2種類があります。それぞれ2011年11月、2012年7月とまだ発売されて日が浅いワクチンです。初代のロタウイルスに対するワクチンは、接種後に腸重積という腸が腸の中に入り込み、腸閉塞を起こす副作用が多かったため発売中止になりました。現在のワクチンは、世界中で調査が行われ、その安全性はWHO（世界保健機関）が2009年6月に最重要ワクチンの一つに指定したことからわかります。ただ生後6週から接種可能ですが、初回接種が遅くとも生後3か月半過ぎなので複数のワクチンと同時接種する必要があることや、それぞれ生後24週と32週までに接種を完了する必要があるので注意を要します。

現在、日本の子どもたちが接種できるワクチンは、このロタウイルスワクチンを含めて14種類あります。しかしながらまだまだ任意接種のワクチンもあり、総てのワクチンが接種年齢に係わらず公費負担とまではなっていません。総てのワクチンが、公費で助成され、VPDから子どもたちを守るように今後の行政のがんばりに期待したいところです。

（文責　血液・腫瘍科　副部長　安井　昌博）

大阪府立母子保健総合医療センター　基本理念

1．周産期・小児医療の基幹施設として高度で専門的な医療を提供します。
2．患者さん中心の、相互信頼の立場に立った、質の高い医療を行います。
3．地域の保健医療機関と連携して、母子保健医療を推進します。
4．母子に関する疾病の原因解明や、先進医療の開発研究を進めます。

小児がん検診（神経芽腫検査）について

母子医療センターでは平成20年度から1歳6ヶ月のお子さんを対象に有料で神経芽腫という小児がんを早期発見するための検査を行っています。

【神経芽腫とは？】

神経芽腫は小児がんの中で白血病・脳腫瘍についで発生頻度が高く、小児の腹部にできるがんの代表的なものです。神経芽腫は副腎や脊椎骨（背骨）のそばにある交感神経節から発生することが多く、大部分が5歳以下で発見されます。初期にはあまり症状がなく乳児検診などで見つかることもありますが、多くは病気が進行し転移を起こした部位の症状をきっかけにみつかります。

【検査について】

神経芽腫の8割は尿中にVMA（バニルマンデル酸）とHVA（ホモバニリン酸）を排出します。神経芽腫があると尿中のVMA・HVAが増えてくるので、尿の濃さに左右されないようにクレアチニンを同時に測定し結果の判定をします。個人差がありますが、お薬や食べ物の影響を受けて数値が高くなるお子さんもいます。

【検査を受けるには】

大阪府（大阪市・堺市の政令指定都市は除く）にお住まいの方は、1歳6か月児健康診査のときに検査セットが配布されます。自宅でお子さんの尿を採ってもらい、同封のスポイトで尿を母子医療センターへ郵送するだけで検査を受けることができます。検査料金は2,000円で同封の郵便振込みの用紙を使うと手数料なしで振り込むことができます。対象地域以外にお住まいの方は電話又はＦＡＸ受付にて検査セットの郵送を行っています。

検査室直通電話・FAX　0725-57-4103（9：00～17：00）

【対象年齢】

この検査は1歳6か月ごろのお子さんを対象としていますが、対象年齢以外の方でも検査を希望される方は受けることができます。この場合も電話でご連絡ください。

【検査結果】

検査結果に異常がなかった場合は、はがきで結果をお知らせします。再検査が必要な場合は、再検査セットを郵送します。この場合、追加の検査料金は不要です。
再検査の結果、精密検査が必要と判定された場合は精密検査を医療機関で受けることになります。精密検査の受診先は、母子医療センターまたは大阪大学医学部付属病院になります。

【年度別受検者数】

	受検者数
平成20年度	8,146人
平成21年度	8,717人
平成22年度	7,885人
平成23年度	7,566人

＜ホームページ＞
Top　→　病院　→　検査科　→　小児がん検診（神経芽腫検査）

（文責　検査科　神経芽腫検査室）

がんばり屋さん

M．Oさん

私は、小学校3年生の時に急性骨髄性白血病を患い、母子医療センターで1年2か月の入院生活を送りました。2000年1月13日、弟がドナーとなり私は骨髄移植を受けました。あれから13年。私の家では、1月13日は移植記念日となり、毎年この日を迎えられたことをうれしく思い、感謝してきました。

当時は、両親や弟に会えない寂しさ、学校へ行って勉強することや友達と遊ぶことのできない悲しさなど、今まで普通に生活していたことが入院したことによって出来なくなりました。また、化学療法の副作用によって髪の毛が抜けてしまい、あまりのショックで母と一緒に抱き合い泣いたことも覚えています。その日から、帽子を被るようになり、私にとって帽子は欠かせないものとなりました。

入院生活は、辛くて苦しかった時期もありますが、それ以上にたくさんの出会いや楽しかった思い出がありました。病棟では、ボランティアの方がお誕生日会やクリスマス会などの催し物をして下さり、とても楽しかったです。看護師の方は、とても優しく笑顔で接して下さり、寂しかった時も笑顔になることが出来ました。嫌いだった注射や検査をする時は、いつも傍にいてくれて言葉を掛けてくれていたので、何事にも勇気を出して頑張ることが出来ました。また、病棟には私と同じように病気と闘っている幅広い年齢の友達がいました。一緒に遊んだり、時には励まし合いながら過ごしました。入院中は、院内学級に通いながら勉強しました。休憩時間に皆でUNOをして遊んだことがとても印象に残っています。

私は、たくさんの人達に支えられて、病気を克服することが出来ました。母子医療センターでの入院生活は、私の人生の中で最も頑張った月日であり、毎日面会に来てくれ、いつも傍に居てくれた両親、ドナーになってくれた弟、医師や看護師、友達など私に関わって下さった人達に感謝の気持ちでいっぱいです。この入院生活を経験していなければ私自身、看護師という職業には就いていなかったと思います。私が入院中に体験したことやその時感じたことを生かして、患者の立場やその気持ちが少しでも理解でき看護につなげることが出来たら嬉しいなと思い看護師を目指しました。学生時代から母子医療センターで働きたいという念願が叶いました。今年で看護師3年目になります。これから、知識・技術や経験を重ねていきながら、「私自身にしかできない看護」を提供していきたいと思います。

ホームページがリニューアルしました

4月15日より、母子医療センターホームページがリニューアルしました。ぜひ、ご覧ください。

URL http://www.mch.pref.osaka.jp/

地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪府立母子保健
総合医療センター

〒594-1101　大阪府和泉市室堂町840

TEL:0725-56-1220（代）
FAX：0725-56-5682

ホームページもご覧ください。
http://www.mch.pref.osaka.jp

いま　研究所では

病因病態部門

生まれてくる赤ちゃんの5%程度は、心臓の異常（心奇形）や脳と脊髄になる管がうまく閉じないことによって生じる二分脊椎など、どこかに生まれつき（先天性）の異常を持っています。実際、乳児の死亡原因の第一位は、この先天性の異常です。先天性異常の原因には、染色体や遺伝子の突然変異や両親から受け継ぐといった遺伝的要因、また母体内の環境や栄養状態など様々な環境要因が関わると考えられています。しかし、そのような先天性疾患（異常）の多くには、病名さえつけられていませんしどうすれば防げるのかほとんど分かっていません。また、妊娠の最も初期である、受精卵が母体の子宮に着床する時期では、受精卵と接する子宮内膜が成熟していないと、着床・その後の赤ちゃんの発生が難しくなり、着床障害や早期流産になると考えられています。しかし残念ながら、子宮内膜の成熟メカニズムなども、まだ解明されておらず、赤ちゃん誕生の謎と考えられています。

研究所・病因病態部門では、イエネズミ（マウス）を用いて受精卵から赤ちゃんの誕生、成長までのメカニズムを解明することを目標に研究を行っています。なぜ、マウスかというと、子宮への着床、仔マウスの発生、成長の様式が、ヒトと大変よく似ていること、また100年以上にもわたって、ヒトの病気を研究する最も適した実験動物とされてきたなどの理由があげられます。具体的な研究方法は、マウスの持っている遺伝子情報を人工的に操作することによって、ヒトとよく似た先天性異常を発症する疾患モデルマウスを開発し、病気の発症メカニズムの解明を試みています。また、受精卵が赤ちゃんへと育っていく、つまり正常な発生・成長に必要な遺伝的あるいは環境的因子を明らかにする研究も進めています。このような地道な研究を日々続けることによって、先天異常や着床障害など、妊娠中の母親、赤ちゃん、子供たちがかかってしまう病気をより早期に発見する手法を探しだし、新しい治療方法の開発へとつなげたいと考えています。

（文責　研究所　病因病態部門　部長　松尾　勲）

アトリウムの壁画がリニューアルしました

平成25年4月8日（月）1階アトリウムの正面にある壁画の除幕式が行われました。

今までの壁画（タイトル「光明池大橋」）は、和泉市立光明台北小学校の児童と、当センター院内学級の大阪府立羽曳野支援学校母子分教室（当時は羽曳野養護学校）の児童の共同制作で、平成16年3月に設置され、9年間当センターを訪れる皆様方に親しまれてきました。

この度、分教室の児童が中心となり、入院している子どもたちや外来に通院している子どもたちも参加し、みんなの共同制作で新しい壁画が完成しました。

壁画のタイトルは「みんなの水族館」。青い海を楽しそうに仲良く泳ぐ魚達が、当センターを訪れる人々の気持ちを和やかにしてくれます。アトリウムのシンボル的存在の壁画が、末永く皆様から愛される壁画になってほしいと思います。

（文責　企画調査室）